日加関係100年の歩み

100年の歩み

1929年7月1日、東京の空にアジアで初めてカナダの国旗が翻った。場所は渋谷駅から400メートルほどの永井屋敷にあった、木造2階建ての仮公使館。式典には、すでに40年以上も前から日本に住んでいたマッケンジー博士やノーマン博士などの宣教師、社会事業家、教師、その家族など、日本在住のほとんどのカナダ人が出席した。ハーバート・マーラー初代公使の着任準備のためすでに5月に来日していたキンリーサイド一等書記官（代理公使）の指揮で、国旗（当時は英国商船旗）が掲揚され、のちに国歌となる「オー・カナダ」のレコードが演奏された。

日加関係の記念すべき幕開けであった。

その年の9月9日に、エンプレス・オブ・フランス号で、マーラー公使が到着し、同17日、天皇陛下に信任状を奉呈する。その後まもなく、公使館は皇居近くの帝国生命ビルの一室に移された。マーラー公使の尽力で、旧笹山藩13代目藩主・青山忠俊子爵の所有地であった現在の場所に、公使公邸と公使館が完成したのは1933年11月のことである。公邸は現在も大使公邸（マーラー・ハウス）として利用されているが、公使館（後の大使館）は今度の新庁舎工事に先立って取り壊された。

マーラー公使が到着して3週間後、日本の初代駐加公使・徳川家正公爵がカナダへ向けて出発した。徳川公使は10月21日、オタワでウィリンドン総督に信任状を奉呈、その日開かれた晩餐会でマッケンジー・キング首相から歓迎の挨拶を受けた。

これによって、カナダと日本は正式に国交を樹立したわけである。

日加関係の夜明け

カナダは、他の英国自治領と同じく、1926年の英帝国会議で対外的独自性が承認されたばかりであった。それまで、カナダの外交はほとんど英国が代行していた。

そのカナダが、歴史的に関係の深い英国を除けば、米国（1927年）とフランス（1928年）に続いて3番目に日本と外交関係を樹立したのはなぜだろうか。

実は、1867年に連邦国家として成立したカナダは、その翌年明治維新を迎えた日本と、早くから少なからぬ交流をもっていた。明治維新直後から貿易が始まり、1876年には日本から緑茶を中心に62万ドル相当の品物がカナダに輸出され、カナダからは丸太や石炭など1万3千ドル分の商品が日本に輸出されている。1873年以来、カナダから宣教師の来日が相次ぎ、布教のかたわら教育、医療、福祉などの分野で活躍した。日本からは、1877年の永野萬蔵に続いて、カナダ（とりわけブリティッシュ・コロンビア州）への移住者が相次いだ。そして東洋人を歓迎しないブリティッシュ・コロンビア州で、深刻な東洋人排斥運動が起こった。

こうした動きの中で、カナダは1897年に商務代理を日本に派遣し、1903年には大阪勧業博覧会に小麦や肉、材木などを出展した。1889年には両国間で郵便為替協定が結ばれ、通商問題や移民問題に対応するためバンクーバーに日本領事館が設置された。日本は1902年にモントリオールに総領事館を設立し、2年後にそれをオタワに移している。1904年には横浜にカナダの商務官がおかれた（関東大震災のあと、神戸に移された）。

対日関係の重要性

マッケンジー・キング首相下のカナダ政府が日本との外交関係樹立についてイギリス政府と協議を開始した1927年、また関係樹立を発表した翌年には、少なくともカナダ側にとっては対日関係を強化するだけの理由があった。キング首相は、徳川初代公使を迎える歓迎晩餐会で、「米国はカナダに最も近い隣国であり、北米大陸における唯一の隣国である。フランスはヨーロッパ大陸でわれわれの最も古い、かつ近い隣国である。日本はアジア大陸における最も近い隣国である」という認識を示している。日本はすでに太平洋地域における一大勢力へと発展し、今後も国際的に発言力を強めていくことは明らかだった。またカナダの対日輸出は30年前の30倍に急増し、産業化や食習慣の変化によって、一層の拡大が期待されていた。移民問題への対応も必要だった。カナダ国内には、大英帝国の足並みを乱すとして、独自の外交関係樹立に反対する声もあったが、キング首相は譲らなかった。初代公使に、かつてモントリオール選出の下院議員で、無任所大臣を務めたこともある“大物”を派遣したことも、キング首相がいかに対日関係を重視していたかを示している。

着任早々から、マーラー公使とスタッフは精力的に仕事を進めていった。公使は、特に、オタワに送るための日本に関する詳細な情報を収集する責任を感じていた。日本は大半のカナダ国民にとって全く未知であるが、カナダにとって計り知れないほど大きな可能性を秘めた国であった。毎月、長大かつ詳細な報告が、本国へ送られた。日本だけでなく、中国の政治経済に関する情報も含まれていた。マーラー公使は、日本をよく知り、在日カナダ人とも会うため、各地を旅行した。1930年には、商業上の情報や政治情報を集めるため、マーラー公使が上海、南京、香港、キンリーサイド書記官が朝鮮、満州、中国北部を訪問している。

そして東京・青山に広大な土地を求め、米国大使館の建設を請け負った大林組に建物の工事を依頼した。建設計画全体の指揮と具体的な設計図の作成は、著名な建築家フランク・ロイド・ライトの弟子、アントニン・レイモンドに頼んだ。地震多発地の建築技術に関する国際的権威、内藤多仲教授が、各段階で助言をすることになった。さらに、マーラー公使自身が計画案、設計図、調度品のあらゆる面に目を配った。

こうしてわずか64日の遅れと549ドル21セントの予算オーバーをしただけで、立派な公邸と公使館が完成した。

マーラー公使は1936年に駐米公使に任命され、後任としてブリティッシュ・コロンビア州のR・ランドルフ・ブルース前州総督が赴任した。すでに73歳の高齢だったブルース公使は、失言問題などもあって、1938年12月に離任。戦争勃発まで、ダーシー・マグリア一等書記官が代理公使を務めた。

戦後の発展

日加関係は戦争で中断した。しかし第二次世界大戦が終わると、カナダは日本の民主化と復興に尽力する。日本生まれで日本史専門家の外交官E・H・ノーマンがマッカーサー司令部でさまざまな役割を果たしたことはよく知られている。1946年に東京にカナダ代表部の設置が認められると、ノーマンはその首席に任命された。代表部の主な仕事は、日加貿易関係の再開、在日カナダ人（ほとんどが聖職者とその家族）への対応、日本に帰った日系カナダ人の帰国問題の処理だった。

1952年のサンフランシスコ平和条約成立とともに、カナダと日本は正式に国交を回復し、ノーマンの後任としてカナダ代表部を率いていたアーサー・メンジーズが大使代理となった。まもなく、日本政府は井口貞夫外務次官を初代駐加大使に任命、カナダ政府はR・E・メイヒュー前漁業大臣を初代駐日大使に任命する。同年、日・米・加の間で北太平洋漁業条約が東京で調印された。

こうして戦後の日加関係が発展へ向けて歩み出した。すでに1953年には、日本はカナダから1億2千万ドル相当の商品を輸入してカナダ第4の貿易市場となっている。日本の対加輸出額は1,400万ドルだった。

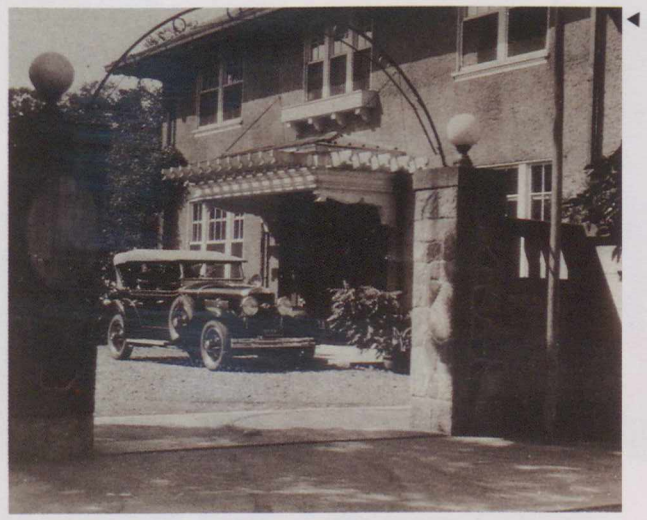
その後、皇太子殿下のカナダ親善訪問（1953）、サンローラン首相の訪日（1954）、日加通商協定の調印（同年）、吉田首相の訪加（同年）、日加航空協定の調印（1955）、河野一郎農相や藤山愛一郎外相の訪加（各1955と58）、日加原子力平和利用協定の調印（1959）、佐藤栄作蔵相の訪加（同年）、岸首相と藤山外相の訪加（1960）、池田首相と小坂外相の訪加（1961）、ディフェンベーカー首相の来日（同年）などに見られるように、日加関係は急速に活発化する。日本の復興とともに貿易は日の出の勢いで伸び、対加投資も増えていった。

日加関係は70年代、80年代に入っても発展を続けた。日加貿易は双方向で180億ドル（1989年）を超え、対日輸出品の内容も製品・加工品の比率が高まってきた。工業製品には、航空機器や通信機器なども含まれている。日本の対加累積直接投資は大手自動車メーカーなどの進出もあって、40億ドルに達した。証券投資は400億ドルに上るものと見られる。科学技術、新素材、宇宙開発などでの協力も進んでいる。

日加定期外相会議、日加経済合同委員会、日加科学技術協議、民間の日加経済人会議など、協議機関も多い。

文化交流、姉妹都市交流、議員交流、観光、留学、JETプログラムによるカナダ人青年男女の来日、研究者の交流など、経済以外の分野における日加関係も盛んだ。

カナダ大使館新庁舎の完成は、こうした日加関係を21世紀へ向けて大きく発展させる、歴史的な1ページになるだろう。



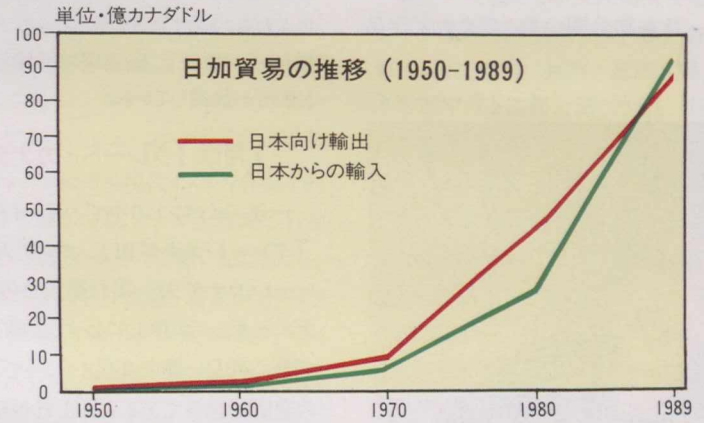
◀仮公使館があった永井屋敷の建物。

信任状奉呈の日のマーラー公使（右から2番目）。公使の左がキンリーサイド氏。

ごあいさつ

ヒュー・L・キンリーサイド

1929年5月、在日カナダ代表部の先陣として日本に到着したとき、スタッフのための事務所を確保するのが私の任務のひとつでした。あのときのささやかな事務所からは、その後ハーバート・マーラー卿が完成させたパラディオ様式の珠玉のような公使館と公使公邸、そして今年完成した新庁舎を予測することは、不可能だったでしょう。

同様に、カナダ代表部の活動も公使館的なものから近代的な大使館活動に拡大しました。加日関係促進のために努力を続けておられる皆さま、そして大使館のカナダ人および日本人スタッフの方々に、ご成功を心から祈っております。

（キンリーサイド氏は、マーラー初代公使が1929年9月に着任するまで、仮公使館を確保するなど正式の国交樹立に備えた。1936年1月に日本勤務を終えたあとも鉱物・資源省次官などさまざまな公職を歴任した。ビクトリア在住、92歳）